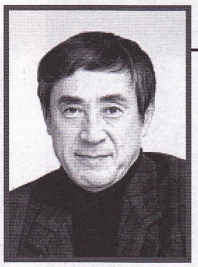

故村井吉敬さん

反戦交友録⑬

東南アジアを歩いた学者、運動家
島と海と森の暮らしを見つめた村井吉敬さん

吉川 勇一

■独自なアプローチによるアジア学者で、市民運動の先輩だった鶴見良行さんが亡くなられたのは、1994年12月で、68歳だった。現在の日本人男性の平均寿命は79歳台になっているのだから、ずいぶん早い逝去で、残念だった。（代表著作は『鶴見良行著作集』全12巻みすず書房）

■この鶴見さんと一緒に多くの研究をされ、その後も継続して活動されたアジア学者が、早稲田大学アジア研究機構教授の村井吉敬（むらいよしのり）さんだった。村井さんは、その著書のほとんどの「はしがき」や「あとがき」などで、この鶴見さんからの教えについて触れている。例えば、村井さんの遺作となった『パプア』（13年刊　めこん）の「あとがき」には、「鶴見さんから、わたしは、『あるくこと』が何なのかを学んだ……」とある。鶴見さんの『バナナと日本人』（岩波新書）と同じく、村井さんの『エビと日本人』（岩波新書）も多くの人びとに読まれてきた。村井さんは、研究でも、また市民運動でも、まさに鶴見さんのあとを引き継ぎ、さらに発展させた学者であった。

■だが、早く逝去されることまで、村井さんが鶴見さんの後を辿るとは、驚きであり、ショックだった。村井さんは今年の3月23日に、69歳で亡くなられたのだ。

■逝去の報道の直後に贈られてきた著書『パプア』の「あとがき」には、2006年にパプアのオトウェリという村を訪ねたときの「少々禍々（まがまが）しい」思い出のことが書かれてある。「沖縄の御嶽（うたき）のようなところ」に出かけた話だ。具体的には、是非この本で読んで欲しいと思うが、村井さんが昨年膵臓ガンだとわかった時、「やはりオトウェリか？」と一瞬思ったと書かれてある。村井さんは、「存外にわたしは科学的で、こんな思いに陥ることは滅多にない。……パプアの大きな自然はちっぽけなわたしたちの近代科学観すら簡単に凌駕してしまうような気がする」と続けている。村井さんが亡くなられた後にこれを読んだ時、私もアジアの大きな自然に圧倒され、村井さんのこの思いを消すことが出来なかった。

■村井さんの葬儀は、4月8日、東京・四谷の聖イグナチオ教会でカトリック式で行なわれた。800人は入るという主聖堂が一杯になっていた。告別説教をされたのは、イエズス会のビセンテ・ボネット神父で、「指紋押捺を拒否して、日本での在留許可が取り消されそうになった時に、法務省入管局の交渉に一緒に行ってくれたのが村井さんだった、……決して学問の象牙の砦にこもっている人ではなく、市民と共に行動してくれる人だった」と言われ、最後に「村井さん、ありがとう」との言葉で締めくくられた。

■喪主でお連れ合いの、やはりアジア学者である内海愛子さんは、「さびしがり屋でいつも人恋しい村井でしたが、多くの友人、仲間に支えられた人生は豊かで幸せだったと思います。いまごろはアジアの海辺を歩いていることでしょう。これからも皆様の記憶のどこかに彼のことをとどめていただければ、これ以上うれしいことはありません」と会葬御礼で言われた。

■村井さんの著書は多数あるが、読者が多かったのは先にのべた『エビと日本人』だろうか。でも、村井さんをこれから知ってみたいというなら、最近のものでは、私は『ぼくが歩いた東南アジア――島と海と森と――』（コモンズ、2009年、3000円＋税　右の写真）をお薦めしたい。毎ページに多くのカラー写真があって、優しい文章の本で、村井さんがどんな生き方、勉強の仕方をされたかがよく分かる、いい本だと思っている。

（よしかわ・ゆういち／本会共同代表）